

公開講演会要旨

古代文献史料にみられる土器 正倉院文書と延喜式には土器関係の記録が多く、文献史料と考古学的成果の融合が望まれている。正倉院文書には50余にのぼる器名があり、用途上、食器、貯蔵器、調理具に分かれる。このうち食器に焦点をあてると、組み合わせでは、麦碗、片盤、饗杯、羹杯、塩杯の5器セット、これから塩杯を欠く4器セット、さらに饗杯を欠く3器セットが抽出できる。この食器のセットに各器の購入価格を加えるならば、①碗形一水碗二羹杯 ②大片碗一片碗二饗杯 ③小赤杯二片杯二羹杯 ④田杯二窪杯一塩杯という系列化が可能であり、形態による名称と用途による名称とが結合できる。さらに、単に盤、杯と書く場合は片盤、羹杯をさすことも明らかとなった。(吉田 恵二)

斑鳩の瓦工たち 斑鳩の寺院から出土した瓦を中心に斑鳩の歴史的背景について考えてみた。まず、7世紀代の軒瓦を4期25年に編年し、単弁素弁軒丸瓦や忍冬文軒平瓦の型式学的変遷から法隆寺をはじめとする寺院の造営年代について論証し、西院伽藍の創建が定説より遡る可能性を指摘した。また、忍冬文軒平瓦の製作技法にふれ、『軒平瓦桶巻き作り』とも呼ぶべき軒平瓦を4枚一度に作る方法について論じた。それは回転台の上に瓦当文様を4つ彫りこんだ環状の範型を置き、その内側に模骨をそわせる。次に、瓦当部を厚くした粘土板を巻き、叩きながら成形すると粘土の可塑性と重圧によって瓦当文様が自然にプレスされる技法である。この技法は飛鳥の造瓦技法と異なる斑鳩の瓦工の独自性といえよう。(岡本 東三)

郡衙遺跡をめぐる諸問題 郡衙は郡庁・正倉・厨・館などに比定し得る建物群からなり、建物規模や配置の企画性等の点で集落と相対的に区別される特徴をもつのが一般的である。これらは水陸交通の要衝に立地しており、物資の集散など都城や国衙との交通関係を重視した選地を行なっている。遺跡の初現は七世紀末頃に求められる例が多く、郡衙が、旧来の豪族支配の単なる延長上としてではなく、中央国家権力と結合した新たな地域支配の政治的拠点として設けられたことを示している。しかし、八世紀後半以降、郡庁の変化、正倉火災、郡衙の移転などが顕著となる。遺跡の存続時期をみると、国衙は十世紀以降も存続しているが、郡衙は九世紀段階で消滅する遺跡が多く、郡衙による地域支配の大きな転換を示唆している。(山中 敏史)

イタリアにおける町並保存 イタリアはヨーロッパの中でも、街区保存の事業を先進的に進めている国である。ポローニャやフェラーラなどで確実に事業が進んでいるし、ローマやヴェネツィアでも計画が策定され、事業が進み始めている。私は、1978・11から1979・7にかけて、ローマに滞在しこれらの具体例を学ぶ機会を得た。現地での見聞をふまえて、①イタリアにおける歴史環境の破壊と町並保存の歴史、②イタリアの町並保存の実状を、法的考え方・行財政上の体制・補助のあり方・保存修復工事の技法・住民の生活と要求など、各方面から報告した。イタリアの実際と技法を直ちに、全面的に日本には導入できないが、考え方や事業の進め方には、大いに学ぶべきものがあることを明らかにした。(上野 邦一)